

大正昭和前期日本人の中国芸能の受容とその研究

—在野研究を中心に—

森平崇文（神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部准教授）

関智英（共同研究者、東洋文庫奨励研究員）

波多野眞矢（共同研究者、東京大学非常勤講師）

呉宛怡（共同研究者、香港理工大学助理教授）

はじめに

本研究は 1910 年代から 1950 年代の大正昭和前期にかけ、日本国内及び中国において中国芸能に関する専門書の刊行や関連記事を発表した在野の日本人ジャーナリストや駐在員、留学生、及び彼らの著作について網羅的に調査し、その日本における中国芸能研究の研究史的意義について再検証することを目的とし、遂行された。

本研究に着手した背景として、第二次大戦後の学術界におけるこの時期の在野での中国芸能研究に対する軽視、あるいは無視が長く存在していたことが挙げられる。日本と中国の文化交流と受容には 2 千年以上の長い歴史が存在するが、芸能の中でもとりわけ実演に関する交流と受容は、両国間の往来が活発になった 20 世紀以降に開始された。

日露戦争以後、日本に留学する中国人は激増していったが、その中に当時日本で流行していた新派劇（新劇）に関心を持つ中国人が東京で 1906 年に芸術団体「春柳社」を結成し、1907 年には都内の劇場において公演を行った。彼らは西欧で誕生した、旧来の伝統演劇とは異なる新たな演劇の形式を日本経由で中国にもたらし、演劇改良運動を牽引することとなった。

一方、中国へ短期、長期を問わず渡航するようになった日本人の中には、滞在中に現地の劇場に足を運び、中国芸能の実演を鑑賞するものが出てきた。その一部の日本人は中国芸能に魅了されて、演者や劇場関係者との交流や文献資料の渉猟によって中国芸能に関する理解を深めていくようになった。中国芸能に魅せられた日本人の多くは、1900 年代以降、中国の主要都市に在住する日本人に向けて発行された新聞や雑誌及び日本の資金的援助を受けた漢字紙などに中国芸能に関する記事を投稿するようになる。更に大正時代の 1919 年、京劇の名女形梅蘭芳の日本公演が実現すると、1920 年代を通じて梅蘭芳の二度目の公演を含めて 5 人の京劇俳優が一座を率いて日本公演を行い、日本国内においても中国芸能の実演を目に触れる機会が増え、中国芸能の鑑賞における手引きとして、中国芸能の概説書や紹介記事などが、中国在住の日本人ジャーナリスト、駐在員、留学生の手によって発表されるようになった。

1910 年代から 1950 年代にかけ日本人が執筆した、中国の国劇である「京劇」の解説と作品紹介を中心とした専門書に以下のものがある（報告者作成）。

表 1 大正昭和前期における日本人を著者とした中国芸能関連書籍一覧

書名	著者	出版年	出版社（都市名）
支那劇と梅蘭芳	村田烏江	1919年5月	玄文社（東京）
品梅記	大島友直編	1919年9月	彙文堂書店（京都）
支那芝居案内（一名 現代支那劇）	黒根掃葉	1919年11月	順天時報社（北京）
中国劇	辻聴花	1920年4月	順天時報社（北京）
支那劇精通	黒根掃葉	1921年1月	東亜公司（北京）
支那劇五百番	波多野乾一	1922年7月	支那問題社（北京）
支那芝居	辻聴花	上巻 1923年11月 下巻 1924年2月	支那風俗研究会（北 京）
支那劇と其俳優	波多野乾一	1925年3月	新报社（東京）
中国戯曲	辻聴花	1925年11月	順天時報社（北京）
支那芝居読本	塚本助太郎	1936年3月	PC会（大阪）
北平的中国戯	濱一衛、中丸均卿	1936年12月	秋豊園（東京）
支那劇鑑賞	永持徳一	1938年4月	東亜研究会（東京）
京劇入門	安藤徳器	1939年9月	日本公論社（東京）
支那劇ノ聴き方	高野重吉	1939年9月	不明
支那芝居と寄席の 話	石原巖徹	1939年9月	満鉄鉄道総局・営業 局旅客課（奉天）
支那劇大観	波多野乾一	1940年10月	大東出版社（東京）
支那の芝居	永持徳一	1941年12月	泰山房（東京）
支那芝居の話	濱一衛	1944年4月	弘文堂書房（東京）
支那劇の話	石原巖徹	1944年3月	新民印書館（北京）
京劇手帖	竹内良男、塚本助太 郎、升屋治三郎	1956年5月	三一書房（京都）
京劇	中国戯劇研究会	1956年6月	淡路書房（東京）

1910年代に3点、1920年代に6点、1930年代に6点、1940年代に4点、1950年代に2点、とコンスタントに出版されている。出版地も日本国内以外に、北京など中国の都市も含まれる。

そしてこれらの著者のほとんどは、中国在住のジャーナリスト（辻聴花、村田烏江、黒根掃葉、波多野乾一、石原巖徹）や駐在員（塚本助太郎、竹内良男、升屋治三郎）、留学生（濱一衛、中丸均卿）であり、濱一衛を除くと帰国後に大学の教員として専門の研究者となったものはいない。彼らのほとんどが民間の愛好家、研究者にとどまってい

た。つまり、大正から昭和前期にかけて、日本人による中国芸能の紹介と研究は主に中国在住の在野の民間人によって担われてきたのである。

このような状況に大きな変化が生じるのが第二次大戦後である。1949年に中華人民共和国が成立してから1972年に日中共同声明が発表されるまでの間、日本と中国との国交が途絶え、往来は限定されたため、在野の民間人が気軽に中国へ渡航して芝居を見物する機会は事実上なくなってしまった。その間、中国では伝統芸能においても社会主義的改良運動が展開され、これまでの中国芸能と大きく様変わりしてしまった。加えて日本における中国芸能の研究の担い手が、在野の愛好家から大学の教員へと移行してしまった。

その結果、1950年代以降の約50年間、20世紀前半の在野の日本人による中国芸能に関する成果が、資料的価値の少ない、好事家によるエッセイ程度の扱いしか受けなくなってしまったのである。彼らの著作が引用文献として学術論文に掲載されることはなくなり、忘れ去られた存在となっていた。

21世紀に入り、20世紀前期の在野の日本人による中国芸能に関する著作は、中国人研究者によって再評価されるようになった。100年近く前の外国人が中国の芸能をどのように評価し、理解していたのかという視点に立ち、彼らの著作を歴史的資料として客観的に検証しようという研究が次々と発表されるようになった。2010年代以降に発表された多くの論考は、全婉澄『日本明治大正年間的中国戯曲研究』鳳凰出版社、2016年、趙海霞『近代報刊劇評研究（1872-1919）』齊魯書社、2017年、李莉薇『近代日本対京劇的接受与研究』広東高等教育出版社、2018年、として書籍にまとめられて公開されている。

本研究は上記のような中国で活発となりつつある、大正昭和前期日本における中国芸能研究に対する再評価に呼応する形で開始された。当時中国芸能に関する著書を著したものの多くがジャーナリストであったため、国内外の多種多様な媒体に中国芸能に関する記事を多く発表している。しかし中国側の研究では新たな資料の発掘までは行っておらず、まずそれら関連記事を発掘、整理する必要がある。それを通じて、著書や記事がどれほど発表当時の中国芸能の様子を正確に伝えているのかを検証してその学術的、資料的価値について検討を加え、日本における中国芸能の研究史を書き換えることはできないかということを目指した。

本研究における分担であるが、森平崇文は代表者として未発掘資料の調査と整理、及び在野研究の歴史、系譜に関する研究を担当した。近現代における日本人「支那通」を専門とする関智英は、中国芸能に関する文章を多く発表した支那通たちの文筆活動とそれを支えた経済事情についての研究を担当した。波多野眞矢は波多野乾一の中国演劇研究について担当した。呉宛怡は1910年代北京で流行していた女優劇に対し、日本人劇評家がどのように評価をしていたのかをテーマに研究を行った。

一、辻聴花に関する総合的研究

辻聴花（1868-1931）は本研究において最も重要な研究対象となる人物である。熊本に生まれ、慶應義塾で学んだ辻は、卒業後に東京で親族が経営する教育雑誌の編集に携わる。1898年9月、中国の教育事情を視察する目的で天津、北京、上海、武漢、南京、蘇州、杭州と歴訪し、翌年2月末に帰国した。1905年に上海で刊行されていた教育雑誌『教育世界』の編集者として招かれたことから長い中国滞在が始まる。蘇州、南京での教員時代に京劇に出会い、演劇関係者との交流も始まった。1910年から1912年までの一時帰国を経て、1912年10月から北京の日系漢字紙『順天時報』に入社して記者となり、同紙が廃刊となる1930年3月まで在籍した。同紙廃刊後も北京に留まり、1931年8月、北京で客死した。



辻聴花（『中国劇』より）

『順天時報』では文芸欄を担当し、1913年10月からは劇評を担当し健筆を揮った。1920年に出版された『中国劇』は中国語で執筆され、京劇の歴史や特徴、決まりごと、代表作や名優の紹介、劇場での観劇方法や公演チラシの見方など、体系的に概説を行っている。その日本語版『支那芝居』上下2巻が1923年と1924年、改訂版の『中国戯曲』が1925年にそれぞれ出版されている。中国演劇に関する著作及び『順天時報』の劇評が何れも中国語で執筆されていたことから、辻の著作や劇評は中国演劇界にも影響力を持ち、辻自身も積極的に俳優との交流を行い、北京の劇界でも一目置かれる存在であった。現在京劇史において認定されている京劇の四大女形も『順天時報』で辻が企画した人気投票によって選ばれている。

辻の劇評や中国演劇に関する研究は、中国では、長く在籍していた『順天時報』が日本の外務省からの資金援助を受けて刊行されていたという政治的背景によって過剰にバイアスがかかり低く評価されてきたが、前述のように21世紀に入り、再評価の動きが出てきた。しかし辻の中国演劇論を、専ら刊行された『中国劇』と『中国戯曲』の2著に限定して検証し、『順天時報』掲載の劇評や他の雑誌や新聞に執筆したものに関しては引用しない傾向が見られる。

一方、日本における辻聴花研究も、1950年代に発表された、中村忠行「劇評家としての辻聴花」『老朋友・新中国』1-3号、1955-1957年と、2010年代に発表された相田

洋「芥川龍之介を驚嘆させた稀代の戯迷(京劇狂)・辻聴花」『シナに魅せられた人々—シナ通列伝』研文出版、2014年、の評伝を超えるものはなく、日本側も『順天時報』の一部の記事を除き、辻聴花の中国演劇論の再評価をするために日本在住の研究者が本来行うべき、辻が発表した様々な雑誌や新聞に掲載の記事を網羅的に調査した研究というものが遅滞として進んでこなかった。

そこで本研究では以下の2つの側面から辻聴花の中国演劇研究に関する再検討を行うことにした。第一は、辻が著作及び『順天時報』以外の媒体で発表した、中国演劇に関する論考を網羅的に調査することである。併せて中国演劇以外に関する辻の論考の発掘にも努める。第二は、辻の著作や劇評に触発されて中国演劇に関心を持つようになり、中国芸能に傾倒していった日本人の存在、活動、著述を調査することを通じ、辻聴花が切り開いた中国演劇論の特徴を再考することである。

表2 辻聴花関連年表(報告者作成)

西暦	元号	出来事	典拠
1868	明治1	熊本県飽託郡蓮台寺村(熊本市西区)に生まれる	剣堂迂人「嗚呼辻中尉」『教育時論』第705号、1904.11.15、25頁
		西尾家から辻家の養子に	榛原茂樹「遺稿を出版したら」『満蒙』第138号、1931.10
		済々黌を卒業	
		慶応義塾入学	
1892	明治25	開発社に入社(社主は叔父で養父の辻敬之)	野満四郎「魂に導かれて」『満蒙』第138号、1931.10
1893	明治26	『(尋常科高等科)習字帖草稿』(普及舎)出版	
1894	明治27	『肥後史談』(普及舎)出版	
1897	明治30	義兄辻太の下で開発社副社長兼編集主任に	
1898	明治31	社説「清国教育問題の研究を促す」発表	『教育時論』第479号
1898.9.3	明治31	長崎より肥後丸にて、天津(9月10日)、北京(9月12日)、天津、上海(10月12日)、武漢(11月1日)、南京(11月	

		22日)、蘇州(日本領事館書記官片山敏彦に面会)、杭州へ教育視察(～2月22日)	
1900.3	明治32	『新編東亜三国地誌』出版	
1901.1.25,26,29,30	明治34	『同文滬報』に「東瀛辻劍堂先生著支那教育改革案」を發表	『同文滬報』 1901.1.25,26, 29,30
1902.10	明治35	『五大州志』出版	
1903.9	明治36	『中国地理課本』出版	
1904.3	明治37	『万国地理課本』出版	
1905.1.18	明治38	『教育世界』(1901年創刊、羅振玉)の招きで上海へ	「上海に於ける衣住食」 『教育時論』第752号、 1906.3.5
1905.1	明治38	蘇州で観劇	「姑蘇の一夜」『教育時論』第718号、1905.3.25
1905.5.2.	明治38	六馬路の農学館から妻子と共に新馬路耶蘇協会隣の羅振玉邸内に移住	「上海に於ける衣住食」 『教育時論』第754号、 1906.3.25
1905.11	明治38	馬路勝業里に移住	
1906?	明治39	蘇州の江蘇兩級師範学堂の教習として地理学を講じる	中村忠行「中国劇評家としての辻聴花」
1907	明治40	南京の江南実業学堂に移る	
1909	明治42	妻が病氣となり子供を連れ帰国	「江南の秋の回顧」『教育時論』第923号、 1910.12.5
1910.1	明治43	熊本へ帰国	中村忠行「中国劇評家としての辻聴花」
1910.5	明治43	妻死去、子供4人	「橋川時雄回顧録」『橋川時雄の詩文と回想』
1912.10	大正1	北京の『順天時報』に入社 社長は亀井陸良(慶応義塾出身)	
1913.5	大正2	「演劇上之北京及上海」を『順天時報』に發表	『順天時報』3279号
1913.10.31	大正2	『順天時報』に劇評を連載(～	3573号

		1930 年)	中村忠行「中国劇評家としての辻聴花」
1920	大正 9	『中国劇』出版	
1924	大正 13	『支那芝居』出版	
1925	大正 14	『支那料理の話』出版	
1926	昭和 1	『支那の北と南』出版	
1930.3	昭和 5	『順天時報』廃刊	
1931.8.19	昭和 7	北京にて死去 (63 歳)	

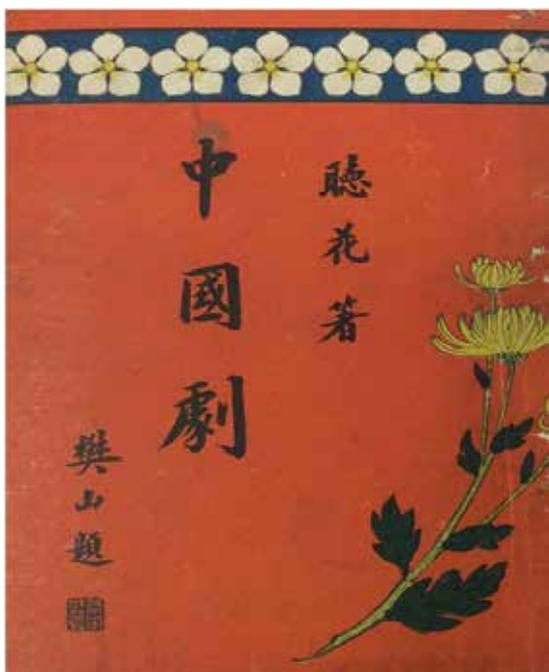
第一の、著作及び『順天時報』以外の媒体で辻聴花が発表した中国演劇に関する論考の発掘、整理についてである。本研究では『新支那』掲載の記事を発掘し、『満蒙』や『北京週報』掲載の記事を整理した。

まず『新支那』である。これは中華民国成立直後の 1912 年 3 月 3 日より北京の新支那社が刊行していた日系の週刊紙で、英文名は "*Japanese edition of the China Tribune*" という。日本国内では京都大学附属図書館に部分的に保存されている。本研究では辻聴花の追悼特集が組まれた『満蒙』第 138 号 (1931 年 10 月) に掲載された榛原茂樹 (波多野乾一) の追悼文から、辻聴花が『新支那』紙上に中国演劇に関する記事を発表していたという情報を得て、同紙を調査したところ、以下の記事が発見できた。辻剣堂口述「支那劇一夕談」(一)～(四)、(六)、(九)、(十) (第 92-95、97、100、101 号) (1914.1.13-4.19)、「支那の女優」(上) (第 142 号) (1915.3.14)、「僕と支那劇」(一)～(五) (第 160-164 号) (1915.8.13-9.12)。

所蔵資料が不完全のため、「支那劇一夕談」にも欠号があり、「支那の女優」も(上)のみ、「僕と支那劇」も(五)で完結なのか断定はできない。それでもこれらの断片的文献を通じ、辻聴花に関する新しい情報を多く得ることができた。何よりも『新支那』の記事は、辻聴花が『順天時報』に劇評を連載し始める前後にあたるため、中国演劇に関する著作が完成する 1920 年代より前の、辻の中国演劇論を窺うことができる点で大変資料的価値は高いといえる。

『新支那』の記事から、辻の中国演劇、特に京劇への傾倒は、『順天時報』入社以前の、南京での教員時代に始まり、その中国演劇に対する該博な知識は南京の劇場関係者及び俳優から直接教えを受けて習得したものであることが判明した。つまり辻の中国演劇論の中核にあるものは、書物ではなく演劇関係者からの学術的には未整理の情報であったということである。それらの情報を自ら整理し、編集し直すかたちで体系的な概説書『中国劇』が完成されたのである。先行研究では辻の中国演劇への傾倒を 1910 年代からと考えてきたが、本研究を通じてさらに 10 年近く遡ることが検証された。また辻と演劇との関係について、辻自身が日本演劇の素養はないと一度記したため、それが謙遜なのか、本当なのか先行研究では不明であった。それが『新支那』の記事から、実際

に中国演劇に接触する以前、日本での演劇経験はほぼ無かったことが確認でき、辻の中国演劇論に日本演劇的分析や審美基準の影響がないことも改めて確認できた。



辻聴花『中国劇』表紙

辻聴花には中国演劇に関する著作の他に、『支那料理の話』（1925年）と『支那の北と南』（1926年）をそれぞれ北京の日系団体「燕塵社」から出版しており、同時に北京にある日系の通信社「極東通信社」が刊行している週刊誌『北京週報』や満蒙文化協会が発行していた雑誌『満蒙』にも多数記事を投稿している。本研究を通じて発掘された、複数の辻聴花の中国演劇以外の論考は、今後辻聴花の中国通としての新たな側面に光をあてることに繋がる。その中国全般に対する理解については、引き続きの課題となる。

他に辻聴花に関しては、『順天時報』に掲載していた劇評の網羅的調査及びそれに基づく目録の作成も、先行研究でなされ

れておらず、また本研究でも着手に至っていない。20年間に及ぶ大部なデータであり、また所蔵機関も東洋文庫や国会図書館関西館など複数に分散しているため、本研究ではデータの収集のみで終わってしまった。目録の作成に関しては今後の課題となる。

二、「支那劇研究会」—辻チルドレンに関する研究

「支那劇研究会」は1923年の末、上海日本人基督教青年会（以下、上海YMCAと略記）内の団体として上海に設立された。主要会員に、内山完造、塚本助太郎、竹内良男、菅原英次郎らがいる。1924年から1926年の間に、上海で同人誌『支那劇研究』全5号と『梨園 支那劇と支那映画』を刊行している。1927年以降は会員個別の活動に分れ、会自体としての活動は休止した。

この「支那劇研究会」に関しては、先行研究として李莉薇「1920年代上海的支那劇研究会与日本人的京劇研究」『中国比較文学』（2013年4期）がある。本研究はこの先行研究を基に、未使用の一次文献を多く活用して同研究会の活動内容をより明らかにし、加えて辻聴花との関係も強調してその関係性について検討する。

まず主要会員についての略歴や中国演劇との関わりについてである。先行研究は魯迅との交友で日中文化交流史に名を留める内山書店店主の内山完造と、回想録を出版している、当時上海の豊田紡績社員であった塚本助太郎についてはその略歴を紹介している。

本研究では『支那在留邦人人名録』金風社（上海）などの資料を用い、残り2名の竹内良男は三菱商事上海支社の社員、菅原英次郎は半田綿行の上海支社長代理であったこと、及び他の会員についても複数その肩書きなどが明らかにできた。これは本研究を通じて明らかになったことである。

また支那劇研究会の機関誌と位置付けられる『支那劇研究』であるが多くの論考が筆名で発表されており、先行研究ではその根拠を示すことなく筆名を、塚本助太郎、竹内良男、菅原英次郎であると認定していた。本研究では2018年に『早稲田文学』にまるごと掲載された、戦時下の上海で刊行された雑誌『大陸』に掲載の塚本助太郎「梨園徒然草」を根拠に、「都路多景湖」が塚本助太郎の、「胡児」が竹内良男の、「升屋治三郎」が菅原英次郎の、それぞれの筆名であることを検証することができた。また塚本助太郎と竹内良男は上海駐在以前、中国語の学習のため北京に留学しており、北京時代に中国演劇に出会い、傾倒していったことも分かった。とりわけ塚本の方は、辻聴花の劇評の熱心な読者から、ついには辻の私邸に週末訪れ教えを乞うたり、中国演劇人を紹介されるなど、辻聴花と師弟関係にあることも判明している。

さらに、支那劇研究会の活動時期に日本国内で刊行されていた『劇』、『劇と評論』、『芝居とキネマ』といった演劇誌にも塚本助太郎や竹内良男、菅原英次郎が本名、もしくは筆名で中国演劇に関する論考を複数投稿していることも本研究で確認できた。これら、同研究会の活動が、海外の一文芸団体の閉じた活動ではなく、同時期の日本国内の劇壇と連動しつつ日本国内の読者にも中国演劇の情報を発信していたことを意味しており、先行研究で紹介された同研究会の行動範囲を超えるものであることが証明できた。



『梨園 支那劇と支那映画』表紙

『支那劇研究』に関しては他にも、先行研究では全く言及されていない支那劇研究会のもう一つの機関誌『梨園 支那劇と支那映画』について本研究ではその記事について明確にすることができた。『支那劇研究』及び『梨園』には、論考以外にも同研究会の活動報告が記されており、欧陽予倩など新劇演劇人や田漢など映画人とも積極的に交流し、教えを受けており、同研究会の活動が伝統演劇に止まらず、新劇や映画にまで広がっていたことも本研究において検証できた。また同誌からは北京の辻聴花から推薦を受けた俳優が上海に公演に来た際、俳優と座談会を開催していることも確認した。



『新中国 演劇・文学・芸術』表紙

中国戲劇研究会」を設立している。同研究会の機関誌として発刊されたのが『老朋友』と『新中国 演劇・文学・芸術』である。塚本、竹内、菅原の3人はさらに1956年に開催された、梅蘭芳の訪日京劇公演に合わせて京劇の概説書『京劇手帖』も出版した。中国戲劇研究会の活動は1957年前後に休止している。辻聴花の中国演劇研究に触発され、自分たちも中国演劇研究に没頭した、塚本助太郎、竹内良男、菅原英次郎ら「支那劇研究会」の同人たちは、まさしく辻聴花直系の「辻チルドレン」と位置付けられる。彼らの活動時期まで含めると辻聴花によって始められた大正昭和前期の在野日本人による中国演劇研究は終戦後直ちに終結したのではなく、1950年代半ばの日本にまで持続したことになる。

おわりに

1910年代から1950年代まで続いた、在野の日本人による中国芸能研究の特徴は、その社会学的アプローチにあった。彼らは中国及び中国人を理解するための手段として中国芸能に触れ、その魅力に引かれていった。ただし芝居通としてではなく、外国人である立場から、演劇の歴史や作品評、役者評以外にも、劇場の構造や観客の生態、さらには演劇界の専門用語やしきたり、習俗にまで貪欲に吸収し、日本の読者に発信していった。それらは当時の中国芸能を知る上で第一級の資料的価値を有しており、現在の芸能研究においても引き継がれる社会学的視点も兼ね備えている。

先行研究では、機関誌『支那劇研究』休刊以降の支那劇研究会の活動について言及していない。しかし本研究ではその活動を1950年代まで広く調査することができた。同研究会の主要会員であった塚本助太郎、竹内良男、菅原英次郎の3人は1936年に『支那芝居読本』を編集し出版している。これも1920年代の支那劇研究会の活動の延長と位置付けることができる。

戦後上海から引き上げてきた塚本助太郎は、「中国研究会」を組織し、『中国資料旬刊』や『東亜資料』といった雑誌を刊行し、時に中国演劇に関する記事を発表していた。同会が1953年に解散すると、直ちに別組織の結成に奔走し、1955年には内山完造、竹内良男、菅原英次郎ら支那劇研究会のメンバーに新しい会員を加えて「中

【謝辞】

本研究は「公益財団法人 J F E 21 世紀財団」の研究助成を受けて達成された。辻聴花の生誕地熊本で共同研究者とともに資料調査を行い、辻聴花ゆかりの地をまわることができたのはひとえに財団のおかげである。本研究は今後も深化を続けていく予定である。そのスタートが順調となったのも研究助成を受けられたことが大きい。